

レーミゾフとポーランド

小 掠 彩



アレクセイ・ミハイロヴィチ・レーミゾフは 1877 年モスクワ生まれ、20 世紀ロシア語散文の革新者といわれる作家だ¹。ロシア・フォークロアに取材した作品が高い評価を得るも、革命後は亡命、異国で長いこと出版の機会を奪われ、故郷

への帰還を願いつつも叶わず、1957 年パリで客死した。終生ロシアの出自とロシア語にこだわりつづけた作家だが、ポーランドとの縁が意外に深い。

19 世紀末、レーミゾフは同時代の多くの文学青年と同じく革命運動に身を投じ、学生デモの扇動者と目され(冤罪であったが)逮捕、流刑を経験する——ペンザ、ヴォログダ、ウスチ・スイソールスク。なかでも、当時「北のアテネ」と呼ばれたヴォログダには「政治犯」として(多くのポーランド人を含む)思想家や文学者、テロリストが集まり、文学論を戦わせていた。この地で文学に開眼した青年は、ロシアにも移入されはじめたヨーロッパ・モダニズムに傾倒する。

彼を特に魅了したのは、世紀末ポーランドに花開いた複合的な文化潮流「若きポーランド派」の旗手スタニスワフ・プシビシェフスキ(1868–1927)で、その戯曲(『憂鬱』、『雪』、『客』)を翻訳し、発表に奔走する。デンマーク人作家マデルングに送った 1903 年の書簡からは、当時のレーミゾフのプシビシェフスキに対する心酔ぶりが伝わってくる²。

「いま、プシビシェフスキ最後の戯曲『雪』を翻訳しています。誓って言いますが、これを読んだらあなたはきっと感動するに違いない」

「幸運が微笑みました。『雪』が掲載されます、送ります。『客』が掲載されます、これも送ります。もしかしたら(!)、カスプローヴィチ[若きポーランド派の詩人]の『ユダ』も掲載されます。それに、おそらくスコルピオン社が『大地の息子たち』を出版してくれます(プシビシェフスキ最後の小説、ぜひ紹介したい)」

レーミゾフにとってプシビシェフスキとはヨーロッパのモダニズムそのもので、彼への熱狂はのちの作品にも色濃く反映されているが、そのことはしばしば否定的にとらえられる。退廃的な芸術至上主義の影響下に創作された初期散文詩に、レーミゾフの資質は活かされておらず、一方このとき培われた「デカダン」のイメージは、長いこと作家につきま

とうこととなった。

さて、こうした熱狂にもかかわらず、レーミゾフ自身はポーランド語を自由に操るには至らなかった。イワン・カリーヤーエフ³との共訳として発表された『憂鬱』だが、じつはカリーヤーエフ単独の仕事と告白されているし、『雪』にも妻セラフィーマのかなり大きな手助け(あるいはそれ以上)があった。しかしそれでも、作家のポーランドへの愛着はたしかだったといえる。リトアニアの出自をもつ妻への愛がそうさせたのかもしれない。

レーミゾフの「ポーランド好き」を語るとき、言及したい人物がもう一人いる。亡命ポーランド最大の雑誌『クルトゥラ』の編集人をつとめたユゼフ・チャプスキ(1896–1993)である。画家で文学評論をものし、軍人でもあった彼が著した回想『スタロビエルスクの思い出』と『無慈悲な大地で』は、第二次世界大戦中のソ連軍によるポーランド将校虐殺事件(カティンの森事件)が初めて活字になったものとされる。リベラルな伯爵家に生まれたチャプスキは、ロシア語を含む数カ国語に堪能だった。ペテルブルグ大学に学び、ロシアの神秘主義に傾倒する。革命後はポーランドへ移り住み、ワルシャワの美術アカデミーに入学するも、卒業をまたずポーランド軍に入隊志願し、上記の戦争を体験する。

亡命ロシア人のレーミゾフと、亡命ポーランド人のチャプスキは、すでに 1938 年にパリで会っているが、親しくなるのはレーミゾフ晩年のことだ。このことを、レーミゾフの隣人で東洋学者、そしてポーランドの血を引く亡命ロシア人の、ワシーリイ・ニキーチン(1885–1960)が回想している。

「AM[レーミゾフ]宅への、ロシア人でない訪問者で、まず名を挙げたいのは、伯爵のユゼフ・チャプスキだ。AM を崇拝するポーランド人で、美術の専門家。アンデルス將軍の戦友で、感動的な本の著者でもある。感動的というのは、これが 1840 年代のロシアとポーランドの関係や、著者自身も参戦した大祖国戦争についても語っているからだ。だが同時にチャプスキは、ソヴィエトの肯定的な現実にも目をむけている。たとえば、豊富な蔵書を誇る、よく整備された図書館というような。彼ほどこうした



側面を語るにふさわしい人物はいまい。というも、家族の領地がミンスク県にあり、彼自身もペテルブルグのギムナジウムを卒業した。そしてワルシャワにいた亡命ロシア人、なかでもフィロソフと親しく、そもそもロシア文学や社会事情に通じていた。我々がよく知らないポーランドの詩人ノルヴィトを AM に紹介したのもチャプスキだ。



AM はポーランド人に対して特別な感情を抱いていた。ポーランド語を知らなかったにもかかわらず。彼がポーランド人と知りあったのは、北方ロシアの流刑地でのことだ。AM は私に、サヴィンコフやカリーエフといった、ワルシャワから来たロシア人についても話してくれた。不合理なロシア化政策のために、彼らは帝政の抑圧を憎悪していた。

私が AM とチャプスキの友情について考えるとき、ある例が思いだされる。それはプーシキンとミツキエヴィチの関係だ。父の赴任先のポーランドで生まれ、母方の親類がポーランド人の私にはワルシャワに親戚もあり、ワルシャワのギムナジウムを卒業した。ギムナジウムでは、ポーランド語で会話すれば、すぐ学校の監禁所に入れられた。私はポーランドとロシアの敵対関係、相互不信、言いたくはないが憎悪といったものに、非常に心を痛めている。もし明晰な判断力と、過去を忘れようという願いをもつならば、私たちは協力し互いに理解しあえると思う。両国の相互理解の可能性の証拠になりうる鮮烈な例が、私にとっては、チャプスキのようなポーランド人や、ゲルツェンのようなロシア人だ。いずれにせよ、AM はポーランド人を愛していた。リトアニア出身の彼の妻が愛するように」⁴

レーミゾフは、チャプスキの評論によって初めてポーランド文壇に紹介された。レーミゾフの死後、『クルトゥラ』誌に感動的な弔辞を發表したのもチャプスキだ。プーシキンとミツキエヴィチにたとえられた二人の亡命者の知られざる友情とその後の展開について、書くべきことは多いが、また別の機会に譲りたい。

写真

- (1) A. M. Ремизов レーミゾフ, 1909
- (2) Иван Каляев カリーエフ, 1905.2.17(暗殺直後)
- (3) Józef Czapski チャプスキ, 1943.1

注

- 1レーミゾフは日本にはすでに1910年代に紹介されている。邦訳には『小悪魔』安井侑子訳 国書刊行会 1981、『十字架の姉妹』斎藤安弘訳 河出書房新社 1975、『第五の悪』灰谷慶三訳 白水社 1973 などがある。
- 2 Письма А. М. Ремизова и В. Я. Брюсова к О. Маделунгу. Сопенгаген, 1976. С. 13, 18.
- 3 Иван Каляев 1877–1905 ワルシャワ生まれの詩人、テロリスト。父はロシア人、母はポーランド人。ロシア大公セルゲイを暗殺し処刑された。この事件をもとにアルベール・カミュが戯曲『正義の人びと』1949 を書いた。
- 4 Никитин. В. П. «Кукушкина» (память А. М. Ремизова). Воспоминания / Ремизов. А. М. Павлиным пером. 1994. СПб. С. 223–225.



おぐら ひかる 埼玉県生まれ、北海道大学卒、東京大学大学院修了、博士(文学)。2017～東洋大学文学部助教、2001～02 ワルシャワ大学日本学科客員講師。訳書にオルガ・トカルチュク『昼の家、夜の家』、『逃亡派』(白水社)など。

『残像』2016 アンジェイ・ワイダ監督の遺作、札幌・シアターキノ、2017年7月8日(土)～東京・岩波ホール、6月10日(土)～7月28日(金)

原題 Powidoki (英題 Afterimage) / 監督・脚本 アンジェイ・ワイダ



[詳細] 2016年/ポーランド映画/ポーランド語/99分/カラー/シネマスコープ/5.1ch/DCP/配給: アルバトロス・フィルム/後援: ポーランド広報文化センター/提供: ニューセレクト/宣伝: テレザ、ポイント・セット

2016年10月9日、アンジェイ・ワイダ監督が急逝した。享年90。世界から尊敬される巨匠が死の直前に完成させた作品は、戦後の社会主義圧政下で、自らの信念を貫き、闘った実在の芸術家の姿だった――。

『残像』は、ポーランド人の画家ヴワディスワフ・ストウシェミンスキ(1893–1952)の晩年の4年間を描いているが、アンジェイ・ワイダが生涯を通して追求し続けたテーマを凝縮させたかのような、まさに遺言と呼ぶにふさわしい作品に仕上がっている。